世界はまだ最後に「歴史」に勝つことができるだろうか？

フランク・プラネイユ

【要旨】

地球がやがて住めなくなるとしても、世界はまだ最後には「歴史」に打ち勝つことができるだろうか。

結局、世界に打ち勝ったのは、実は「世界を従わせること」（「歴史」）の方だったのだろうか。この（地球の）「消滅」に直面しつつある今もなお、カミュの作品はそれに抗う頼みの綱と言えるのだろうか。彼の作品は、過ぎ去った時代の遺物に、言いかえれば神話になったのだろうか。だが、「神話はそれ自体では生命を持たない。神話は我々がそれに血と肉を与えることを待っている。」それならば、どのようにすれば神話に血肉を与えられるのか。「グローバル化」に直面しながらも、世界の忘却に抗って、いかにして、生命を求めればよいのだろうか。

【プロフィール】フランク・プラネイユ：Rencontres Méditerranéennes Albert Camus の副会長で、カミュ研究会のメンバーであり、コレージュ（中学）の校長でもある。アルベール・カミュの作品に関連するマスターの講座の教授であり、数々の講演を行うとともに、さまざまな展示や展覧会の委員を務めている。

彼は、カミュの作品に関するシンポジウムだけでなく、ルネ・シャールの作品に関するさまざまなシンポジウムにも、定期的に参加している。２００３年には Bordas 社の《L'œuvre au clair》叢書の一冊として、『異邦人』に関する研究を出版した。プレイヤッド版カミュ全集の編集チームのメンバーであり、Gallimard 社から刊行された『アルベール・カミュ ルネ・シャール書簡集』と『太陽の後裔』のテキスト校訂と、注および解説も担当した。

彼は自分のことを極めて恵まれた読者だと考えている。というのも、カミュの作品のおかげで、さまざまな出会いと発見の機会に恵まれ、常に自分に力を与えてくれる、さまざまな考察が彼にもたらされたからである。